

平成 27 年度 春季勉強会

『第 2 部『研究・発表は新たなるステージへ～国際化, 英語発表・論文, 倫理』』

公益社団法人 日本放射線技術学会 近畿支部
学術委員会

「研究倫理とは」

JSRT 近畿支部 倫理審査相談員

奈良県立医科大学附属病院 中前 光弘

われわれ, 診療放射線技師には, 安全で質の高い診療・治療を患者さんに提供するために, 公益社団法人日本診療放射線技師会は, 診療放射線技師倫理綱領で5項目の『職業倫理』を定めている。

先人たちは, 職業倫理の高揚のために切磋琢磨し, 放射線技術の向上を目指してきた。しかし, これらの成果を学会などで発表する場合は, “研究倫理”が適応されることは, あまり認識されていない。

公益社団法人日本放射線技術学会では, 平成 24 年 4 月に倫理規定を制定している。

一方で, 研究や教育などの学会活動を支援するために「倫理規定の適切な取り扱いのためのガイドライン」を公開している。これは, 本学会の倫理規定に準拠して必要な措置を遂行する際の基準となるものである。

本講演では, 本学会の定める倫理規定から『研究倫理』について解説する。

「研究発表・論文塾での経験」

京都大学医学部附属病院 梶迫 正明

診療放射線技師の研究は先人たちが長年にわたり積み上げてきました。研究は論文にして初めて形になります。しかし, 論文を書くというのは大変な肉体的・精神的労力を伴い, 実際に研究発表をしても, そのまま論文にせず研究を終えてしまうことが度々あります。

そのような中, 論文執筆にあたり後押しをしてくれるきっかけのひとつが「論文塾」になります。近畿支部の事業である論文塾の活動に関して知らない方のために, 今回は自身の研究発表や論文塾で経験したことをお話しする予定です。研究をしたくてもどうすればいいかわからない方, 論文を書きたいけど自信のない方などが, 本講演を聴いて何かヒントが得られれば幸いです。

「Why we should present in English? ～なんで英語で発表せなあかんねや～」

熊本大学大学院 白石 順二

日本放射線技術学会では、2014年に出された国際化特別委員会の答申に則って、2016年の総会学術大会から口述発表と電子ポスターの両方を全面英語化し、さらに、2018年の総会学術大会からは口述発表の50%を英語発表とする予定である。現時点では、学会員の多くは英語が聴き取れなくて、英語で書くことや話すことも苦手であると予想されるが、ほとんどの人は最低8年間の英語教育を過去に受けており、ただ、英語を使うためのトレーニングができていないだけで、素養は十分にある。最初から自在に英語を聴いたり話したりできる人などいるはずはなく、経験を重ねることにより、少しずつ英語が使えるようになる。

本講演では、学会が国際化を目指す本当の意味と、英語に対する大きな勘違いを参加者の皆さんに理解してもらうことを目的とする。この講演をきっかけにして、多くの方が、英語を使うことに対する恥ずかしさや抵抗をなくし、積極的に英語を使うようになることを期待している。

「世界に通じるコミュニケーション:通訳者の視点から」

東京外国語大学大学院 新崎 隆子

社会のあらゆる場所で急速なグローバルが進み、英語能力の必要性が叫ばれていますが、英語さえ話せばグローバルコミュニケーションはできるのでしょうか。通訳者として長年、異文化間の相互理解を助ける仕事をしていますが、通訳者の努力だけでは限界があると思うことがたびたびあります。その多くが、コミュニケーションスタイルの違いを認識していないことによるものです。外国語の能力があっても相手の言語とコミュニケーションスタイルがずれていると、誤解や不信感を与えてしまいます。世界に通用するのはどのような話し方でしょうか。国際会議に参加する人は、母語のコミュニケーションスタイルの特徴を認識し、それが文化や言語を異にする人たちにどのように受け止められるかを考え、相手に理解してもらうための工夫をする必要があります。発表では日本人とアメリカ人の価値観や発話スタイルの違いを例にとり、異文化の人たちと交流するための助言を行います。